Japan society of Home Economics

日本家政学会誌 Vol. 56 No. 3 197～207 (2005)

資 料

中国都市集合住宅における「空巣家庭」の生活様態と住空間の住様式上の検討

—四川省成都における—

談 麗玲，今井範子*，伊東理恵*

（奈良女子大学大学院人間文化研究科，* 奈良女子大学生活環境学部）

原稿受付平成16年8月23日；原稿受理平成17年1月22日

A Study about the Living Pattern and Living Space of KARANOSU Families from the Viewpoint of Dwelling Style in Urban Apartments in Chengdu, China

Liling TAN, Noriko IMAI* and Rie ITO*

Graduate School of Human Culture, Nara Women's University, Nara 630-8506
** Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara 630-8506*

We have studied KARANOSU families or elderly families to clarify their living patterns, orientation of dwelling style and discontent with housing. The results of our study are as follows: 1) As to how they spend their holidays as well as weekdays, their living behavior is multifarious; doing housework, pursuing their interest, participating in community activities, reunion with children, and so on. The reunion with their children mostly takes places on holiday, and it is safe to state that the elderly positively communicate with their children. 2) As to living orientation, most elderly families have no plan to live with their children. Most elderly would hope to be cared for at home should circumstances compel them to be taken care of on account of their health or other reasons. 3) The place they are most discontented with is the bathroom, the reason being that it is not spacious enough, that it is slippery, that it is not abounding in sunshine, and that it is poorly ventilated.

(Received August 23, 2004; Accepted in revised form January 22, 2005)

Keywords: dwelling style 住様式, urban apartment 都市集合住宅, living patterns 生活様態, China 中国, elderly 高齢者, KARANOSU families 「空巣家庭」.

1. 緒 言

儒教*1文化の中国では，『論語・里仁』に「父母在世児不遠行」（「父母在せば，遠く遊ばず」）とあるように，親を大切にし，「四世同堂」*2が理想的な家族像とされてきた．しかし，近年，住宅商品化政策，戸籍緩和政策などの経済改革が進むにつれ，核家族が増え，子世代と別居する高齢者世帯が増えつつある．このような子供と別居している老人夫婦のみの高齢者世帯や単身の高齢者世帯を指して，中国でも子供が巣を立って空になったという意味から，「空巣家庭」*3と称している．中国老齢委員会の統計によれば，2002年に「空巣家庭」は高齢者のいる世帯の3分の1を占めるが，2005年には，「空巣家庭」は高齢者世帯の2分の1以上を占め，高齢者世帯の主要な形になると予測されている．また，1978年から実施された「一人っ子政策」は20年を経て，今後，一人っ子世代が次々と

*1 儒教とは中国春秋時代の学者，思想家である孔子を祖とする教学であり，その教えの内容は現在でも中国の中学校および高等学校で教えられている．

*2「四世同堂」とは，四世代同居のことである．

*3「空巣家庭」とは，日本でいう犯罪の「空き巣ねらい」の意味ではない．また育児を終えた中年夫婦だけの「空の巣」ともニュアンスがやや異なる．高齢者だけの家庭を指す[1]．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

婚期を迎えることにより，「空巣家庭」の増加はさらに進行することが予測される．高齢化対策において「家庭扶養」*4を基本とする中国では，「空巣家庭」の増加は今後の高齢化社会における最も大きな問題となっている．

このように，急速に増えつつある「空巣家庭」の高齢者の主な養老方式*5として，中国老齢科学研究センターの専門家は，在宅を基本として「社区」*6（コミュニティ）に頼るという方式であると提言している．社区では高齢者に対応した生活支援が課題となるとともに，「空巣家庭」の高齢者が自立し安心して暮らすために，安全な住環境を整えることが重要な課題になっている．その課題に応えて，最近各「社区」や住宅建設会社は，団地内で高齢者のために茶室，趣味室，スポーツなどの施設を提供するなど，ソフト面の積極的な整備を進めている．しかし，安全かつ快適な生活を支える住宅の供給というハード面では，その配慮は全くされていないのが実情である．

本研究では「空巣家庭」の生活様態，居住志向，及び住戸に対する不満点を明らかにし，今後の中国の高齢化社会において，都市集合住宅における「空巣家庭」に対応する住空間のあり方を示唆することが目的である．

2. 研究方法

(1) 既往研究

中国都市における在宅高齢者を対象とする最近の既往研究の中で，高齢者と子，孫との関係を中心にした支え合い居住は，人的，空間的条件の微妙なバランスの上に成立していることを明らかにした，藤田らの「中国の都市高齢者世帯における支え合い居住に関する研究」[2]がある．また在宅高齢者の基本的な生活像を明らかにした研究として，曹らの「天津中層集合住宅団地に住む高齢者の生活様態とその特徴」[3]があげられる．しかし，これらの研究は「空巣家庭」に着目した研究ではなく，本研究のように，「空巣家庭」の生活様態や別居子との居住形態及び住空間をとりあげたものは，これまでみられない．

(2) 調査対象地の選定

人口高齢化，子世帯と別居するという「空巣家庭」の増加は，北京，上海などの先進都市だけでなく，内陸都市においても進行している．中国では，2003年から，従来の人口流通を防ぐための戸籍制度が本格的に廃止され，戸籍緩和制度を打ち出した．これにより出身地以外の都市での就職，永住などが容易になり，内陸の若者の上海，広州などの先進都市への出稼ぎや就職が増加しつつある．このようなことから，近い将来に先進都市より内陸の方に，「空巣家庭」の割合が増加していくであろう．

そこで，本研究の調査対象地として，内陸都市で「空巣家庭」の増加のみられる四川省成都市を選定した．成都市は，中国の西南に位置し，面積12,390 m^2，人口は2001年の統計時点で約1,009万人である[4]．60歳以上の人口は全人口の17.5%を占め，内陸都市では人口高齢化がかなり進行している都市である[5]．

(3) 調査方法

本研究では，「空巣家庭」の生活様態や居住志向の動向を探るために，調査対象世帯は，夫婦のいずれかが60歳以上の「空巣家庭」を中心とし，まもなく高齢期を迎える，50歳代の「空巣家庭」予備軍までを含めた．後者は年齢が少し若いものの，すでに子供が独立した夫婦，あるいは単身世帯となり「空巣家庭」状況にあるため，本研究の対象に含めている．なお，分析は基本的に60歳未満を含めて一括して行っているが，年齢別にみた場合に結果に違いがみられる場合は60歳未満を分けて示している．

調査方法は，成都市にある9団地の居住者のうち，団地内の活動室，茶館，交流室で活動している既婚子と別居する世帯を選定し，質問紙調査を行った．質問紙の記入は原則として夫婦のどちらか一方に依頼したが，視力が不十分な回答者や，字を完全に読めない回答者に対して，ヒアリングにより，調査員が質問紙に記入した．さらに，詳しく住み方を把握するために，質問紙調査の対象から，近年に多く建設された住戸タイプを抽出し，写真，ヒアリングにより，8例の事例調査を併せて行った．

*4「中華人民共和国老年権益保障法」では高齢者の扶養は主に「家庭扶養」と規定されている，その内容は経済面だけではなく，親の介護問題も含んでいる．

*5 養老方式とは，老後の居住場所，過ごし方を指している．

*6「社区」とはcommunityの中国語訳であり，一定の区域に住む人々によって構成される社会生活の共同体と定義されている．欧米の「コミュニテイ」は，一般に，共通の利益あるいは共通の文化や宗教，信仰を持つ人々によって構成され，民衆の参加と自治を重視している．これに対し，中国の「社区」は政府街道弁事処と住民委員会が作ったものである．住民に対して，養老，医療，治安などのサービスを提供するものである．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表1．回答者の概要

性別				年齢					
男性	女性	不明	計	60歳未満	60～65歳未満	65～70歳未満	70歳以上	不明	計
55.6	42.4	2.0	100.0(203)	33.0	30.5	21.2	12.8	2.5	100.0(203)

単位：%(N)

表2．調査対象住戸の概要

住戸タイプ	
3室2庁2衛	13.8
3室2庁1衛	26.1
2室2庁2衛	7.9
2室2庁1衛	30.0
1室2庁1衛	3.9
1室1庁1衛	6.9
その他	9.4
不明	2.0
計	100.0
(N)	(203)

延べ床面積	
60㎡未満	22.7
60～80㎡未満	27.5
80～100㎡未満	22.2
100㎡以上	26.6
不明	2.0
計	100.0
(N)	(203)
平均述べ床面積	83.9㎡

単位:%

調査時期は，質問紙調査は2003年12月下旬～2004年1月中旬，事例調査は2004年1月上旬である．調査状況については，250世帯に調査票を配布し，203票の有効サンプル数を得た．回収率は81.2%である．回答者の概要を表1に示す．

3. 結果及び考察

(1) 調査対象の概要

1) 調査対象住宅の概要

近年中国において，入居者を高齢者世帯に限定した老年住宅，老人マンションが建設されるようになった．しかし成都では，このような集合住宅はこれまで建設されなかったため，調査対象住宅は1992～2001年に，住宅開発会社が一般庶民向けに建設した商品房（日本のいわゆる分譲マンション）とした．住戸タイプは表2に示すように，2室2庁1衛[*7]と3室2庁1衛という平面が多い．なお，対象とした集合住宅9団地のうち，6階建てが3カ所，7階建て6カ所であり，いずれもエレベーターは設置されていない．

2) 調査対象世帯の概要

調査対象世帯の概要を表3に示す．世帯類型は，夫婦が大半を占める．年齢は，高齢期をひかえる60歳未満が夫では24%，妻では38%を占める．また「60～65歳未満」，「65～70歳未満」を合わせた前期高齢者[*8]が，夫では54%，妻では44%である．「70歳以上」の後期高齢者が，夫では14%，妻では7%である．このように，調査対象世帯は高齢者世帯が多くを占めている．健康状態は，夫，妻ともに「健康」である者が7割を占め最も多い．子世帯との別居年数は「5年以上」が4割，「3～5年未満」が3.5割を占めている．平均子供人数は2人である．また別居している既婚子と同居経験の「ある」のは77.3%であり，多くを占めている．

職業の有無については，中国では経済改革以前，仕事は分配制であり，都市戸籍を持つ者に対して，性別に関係なく職が保障されてきたため，表2に示すように，「無職」であった者は，夫では存在せず，妻では「4.5%」と極少数である．

また対象世帯の経済状況については，表4に示すように，生活費は「退職金」が6割弱を占めて多い．中国では60歳で退職するのが基本であるが，企業体制（国有から株式会社への転換）を改革することにより，それまでに退職をする者も多く，調査対象世帯においても，60歳未満でも半数以上が退職金で生活していることがわかる．「退職金と子供の援助」という子供の援助を受けた世帯は，年齢が上がるにつれ割合が増加する傾向がみられる．70歳以上では「退職金」と「退職金と子供の援助」がほぼ同割合である．住宅の購入費については，「自分達が負担」した世帯が7割弱を占め多い．「子供が負担」「自分達と子供が半分ずつ負担」という子世代の支援を受けた世帯は年齢が高くなると，その割合が高くなる傾向がみられる．

(2) 「空巣家庭」の生活様態

1) 別居子との居住形態

中国の都市において，従来の住宅分配制が廃止され，80年代から住宅商品化政策が実施されて以来，人々の住環境が著しく改善されてきた．このような状況に

[*7] 室とは居室のこと，庁とは客庁（リビングルーム），餐庁（食事室）のこと，衛生間とは，バスルームのことである．例えば，2室2庁1衛とは，居室2室，客庁1室，餐庁1室，衛生間1室という住戸タイプのことである．

[*8] 中国では前期高齢者は60歳以上から70歳未満の高齢者を指す．後期高齢者は70歳以上の高齢者を指す．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表3. 調査対象世帯の概要

世帯類型		年齢[1]	夫	妻	健康状況	夫	妻
夫婦	94.5	60歳未満	24.1	38.1	健康	78.4	77.3
夫のみ	2.0	60～65歳未満	30.2	30.2	病気がち	13.1	15.3
妻のみ	0.5	65～70歳未満	23.6	13.9	介護が必要	5.0	5.4
不明	3.0	70歳以上	14.1	6.9	不明	3.5	2.0
		不明	8.0	10.9			
計	100.0	計	100.0	100.0	計	100.0	100.0
(N)	(203)	(N)	(199)	(202)	(N)	(199)	(202)

別居年数		職業[2]	夫	妻	子供人数[3]	
1年未満	9.9	管理職	29.1	16.3	1人	36.5
1～3年未満	8.4	販売職	1.5	1.0	2人	38.3
3～5年未満	34.0	経営職	9.5	3.5	3人	16.3
5年以上	39.3	専門技術職	7.5	8.4	4人	5.9
不明	8.4	教職	5.0	15.3	5人	2.5
		無職	0.0	4.5	6人	0.5
		その他	2.5	6.9		
		不明	44.9	44.1		
計	100.0	計	100.0	100.0	計	100.0
(N)	(203)	(N)	(199)	(202)	(N)	(203)

1) 夫の平均年齢：62.8歳，妻の平均年齢：60.1歳
2) 定年退職した者に対して，定年退職以前の職業を記入してもらった． 単位:%
3) 平均子供人数：2.0人

表4. 「空巣家庭」の経済状況—回答者年齢別—

	全体	60歳未満	60～70歳未満	70歳以上
生活費の来源 (***)				
1. 退職金	57.1	53.8	61.9	44.0
2. 子供の援助	2.0	1.5	1.9	4.0
3. アルバイト代で	9.0	20.9	2.9	0.0
4. 退職金とアルバイト代	7.0	10.4	5.7	4.0
5. 退職金と子供の援助	21.4	11.9	23.8	40.0
6. その他	3.5	1.5	3.8	8.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0
(N)	(203)	(67)	(105)	(26)
住宅購入費 (*)				
1. 自分達が全部負担	67.6	83.6	61.5	53.8
2. 子供が全部負担	8.5	3.0	9.6	15.4
3. 自分達と子供が半分ずつ負担	20.4	11.9	23.1	30.8
4. その他	3.5	1.5	5.8	0.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0
(N)	(203)	(67)	(105)	(26)

***P<0.001, *P<0.05 〈不明のぞく〉 単位:% (N)

おける，別居子との居住形態をみる．自宅から子供の家までの時間距離をみた結果（子供が複数存在する場合は最も近い別居子に着目した），子供が「成都に住んでいない」17%，「歩いて20分以内の団地に住む」15%，「同じ団地に住む」14%，「自転車で30分以内の団地に住む」13%などであり，別居子との居住形態が多様化していることが確認される．さらに，この別居子と親世帯との時間距離によって「同じ団地に住む」場合を「近近居」，「徒歩10～20分以内の団地に住む」を「近居」，「自転車で20～30分以内の団地に住む」を「遠居」，「車で30分以上の団地に住む」「成都に住んでいない」を「遠遠居」に分類した．回答者の年齢別（図1）にみると，60歳未満では遠々居が5割，遠居が2割と親子が遠く離れて生活しているのに対し，親世代の年齢が上がるにつれ近居の占める割合が増加し，遠遠居が少なくなる．このように，親世代が比較

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

的若く健康である間は親子が離れて生活する割合が高いが，親世代がより高齢になると親子が比較的近いところに居住する傾向がみられる．

2） 別居の契機

子供と別居した契機は（表5），「子供の結婚」，「子供の他の都市での就職」，「子供の留学」など多様な理由があるが，とりわけ多くあげられたのは「子供の結婚」である．とくに60～70歳未満，70歳以上では「子供の結婚」が理由で子と別居した世帯がそれぞれ72%，87%であり，他の理由と比較して多い．60歳未満では，「子供の結婚」についで「子供の他の都市での就職」が32%，「子供の留学」が11%と他の年代に比較するとその割合が高い傾向がみられる．戸籍緩和制度により就職地域が拡大したことや，大学入学以前から海外留学をする傾向にあることがこの背景にある．このように中年層においてすでに「空巣家庭」化が始まっている動向が把握される．

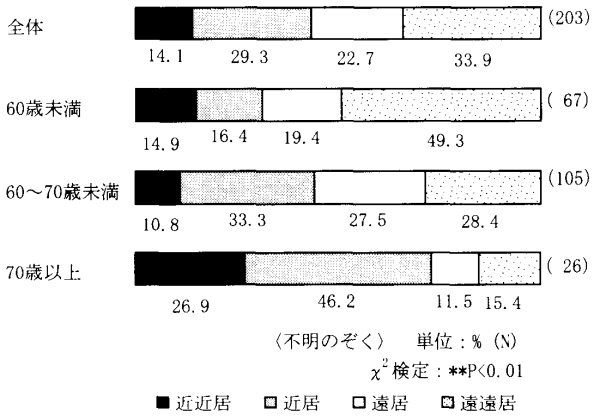


図1．別居子との居住形態—回答者の年齢別—

さらに別居子との居住形態別にみると，「近近居」「近居」をはじめ「遠居」までの比較的近い距離では「子供の結婚」という理由が約8割を占め多いことから，結婚を機に独立する場合には親世帯の近くに住む傾向がある．また子供が住宅を購入して親世帯から独立する場合に，親世帯に近いところで住宅を購入する傾向がみられる．これに対し「遠遠居」の場合，「子供の他の都市での就職」が「子供の結婚」と同程度に多くを占め，遠い地域で就職することにより，親子が遠く離れて生活するに至ったことがわかる．

3） 生活様態の特徴

i）子世帯との交流（会う頻度）

子供と会う頻度は（図2），全体として，「休日に会う」が6割弱であり，最も多い．「空巣家庭」の高齢者世帯は子世帯と積極的に交流していることがうかがえる．

別居子との居住形態別にみると，「近近居」の場合，「毎日会う」が6割弱であり最も多く，子世帯との交流は頻繁であることがわかる．一方，「近居」と「遠居」の場合では「休日に会う」が6割であり，「毎日

表5．別居の契機—回答者の年齢別，別居子との居住形態別—

別居の契機	全体 (N=203)	年齢別 60歳未満 (N=67)	年齢別 60～70歳未満 (N=105)	年齢別 70歳以上 (N=16)	居住形態別 近近居 (N=28)	居住形態別 近居 (N=58)	居住形態別 遠居 (N=45)	居住形態別 遠遠居 (N=67)	χ²検定 年齢	χ²検定 居住形態
1. 子が結婚したから	66.8	50.8	72.8	87.0	79.2	78.9	80.0	42.4	**	***
2. 子が他の都市で就職したから	27.0	32.3	25.2	17.4	20.8	10.5	20.0	47.0		***
3. 子が留学したから	8.7	10.8	7.8	4.3	12.5	5.3	6.7	10.6		
4. 自分達が住宅を購入したから	8.2	3.1	12.6	4.3	4.2	7.0	11.1	9.1		
5. 子が住宅を購入したから	28.1	21.5	27.2	52.2	25.0	43.9	35.6	12.1	*	***
6. 子が配偶者の親と同居したから	10.2	10.8	7.8	17.4	8.3	10.5	6.7	12.1		
7. 孫が幼稚園に入ったから	8.7	7.7	5.8	26.1	12.5	19.3	2.2	3.0	*	**
8. 住宅が狭く，一緒に住めない	20.4	12.3	23.3	30.4	20.8	38.6	20.0	4.5		***
9. 子に自立をさせたいから	17.9	23.1	14.6	21.7	16.7	19.3	17.8	18.2		
10. その他	5.6	9.2	4.9	0.0	4.2	1.8	0.0	13.6		**

単位：%［複数回答］〈不明のぞく〉

χ²検定：***P＜0.001，**P<0.01，＊P＜0.05

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

会う」は1割程度である．また「遠遠居」の場合は，「休日に会う」が5.5割を占めるものの，「ほとんど会わない」が3割を超え，「近近居」「近居」「遠居」よりかなり多くなっている．このように，別居子との時間距離が，遠距離化するのに伴い，別居子との交流頻度は低くなる傾向があり，別居子との居住形態別に相違がみられる．

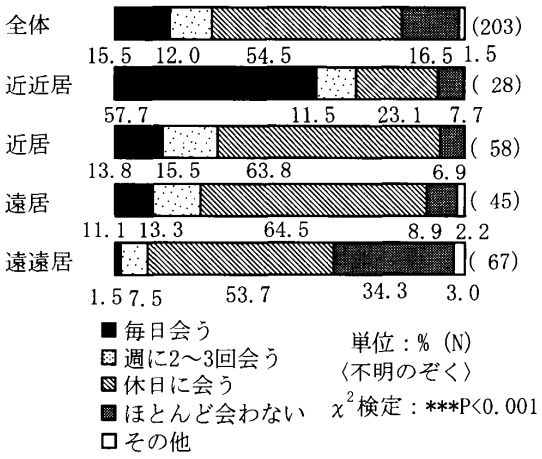


図2．子供と会う頻度―別居子との居住形態別―

ii）日常行為（昼間の過ごし方）

「空巣家庭」の日常生活行為（昼間の過ごし方）を平日と休日に分けて整理したものが表6である．

まず，平日の過ごし方をみると，全体では，多くの者が「家事をする」，「スポーツをする」，「麻雀をする」，「趣味を楽しむ」，「親戚との付き合い」，「孫の面倒をみる」，「近所との付き合い」，「社区活動に参加する」などであり，生活行動の多様さがうかがえる．

平日の過ごし方を別居子との居住形態別にみると，「近近居」，「近居」の場合，「子供の家事を手伝う」，「孫の面倒をみる」といった子世帯への家事援助をする者が多いのに対し，「遠遠居」の場合は，家事をのぞくと「趣味を楽しむ」，「スポーツをする」など自身の楽しみごとをして過ごす者が多い傾向がみられる．

休日の昼の過ごし方については，「家事をする」，「親戚との付き合い」「子供家族との団らん」「スポーツをする」など，平日と同様に行動の多様さがうかがえるが，子供とのかかわり項目の中で，「孫の面倒をみる」，「子供の家事を手伝う」といった子世帯の家事

表6．昼間の過ごし方―別居子との居住形態別―

過ごし方	居住形態 全体 (N=203)	近近居 (N=28)	近居 (N=58)	遠居 (N=45)	遠遠居 (N=67)	χ^2検定
平日						
1. 子供の家事を手伝う	9.9	11.1	22.4	6.7	1.5	**
2. 孫の面倒をみる	18.8	33.3	22.4	24.4	7.5	*
3. 親戚との付き合い	33.2	33.3	36.2	35.6	28.4	
4. 近所との付き合い	27.7	37.0	27.6	22.2	28.4	
5. 趣味を楽しむ	31.2	18.5	22.4	33.3	43.3	*
6. 老年大学に通う	14.9	14.8	8.6	20.0	16.4	
7. 社区活動に参加する	32.2	29.6	32.8	28.9	35.8	
8. スポーツをする	48.0	51.9	43.1	37.8	59.7	
9. 家事をする	77.7	81.5	72.4	80.0	79.1	
10. 麻雀をする	38.1	44.4	41.4	44.4	26.9	
11. アルバイトをする	12.4	14.8	12.1	11.1	13.4	
12. その他	5.9	11.1	3.4	4.4	7.5	
休日						
1. 子供家族との麻雀	14.6	22.2	15.8	17.8	7.6	
2. 子供家族との団らん	30.7	37.0	38.6	46.7	12.1	***
3. 孫の面倒をみる	19.6	33.3	26.3	17.8	10.6	*
4. 子供家族との郊外旅行	20.1	29.6	19.3	33.3	9.1	*
5. 子供の家事を手伝う	12.6	14.8	29.8	6.7	1.5	***
6. 親戚との付き合い	35.7	37.0	26.3	42.2	40.9	
7. 近所との付き合い	23.1	40.7	21.1	17.8	22.7	
8. スポーツをする	21.1	25.9	17.5	20.0	24.2	
9. 家事をする	63.3	51.9	54.4	60.0	77.3	*
10. 夫婦の郊外旅行	39.7	29.6	40.4	33.3	47.0	
11. アルバイトをする	3.5	7.4	3.5	2.2	3.0	
12. その他	4.0	0.0	3.5	0.0	9.1	

単位：%［複数回答］〈不明のぞく〉

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

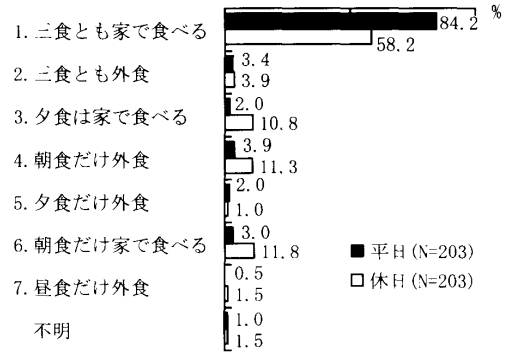


図3. 食事場所

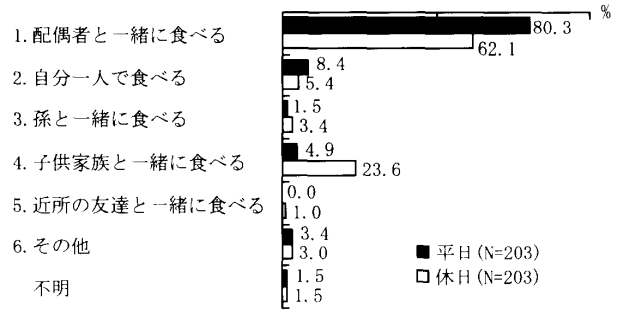


図4. 食事の相手

援助をする者はそれほど多くない.「子供家族との麻雀」,「子供家族との団らん」「子供家族との郊外旅行」など子世帯と交流する者が多い. 休日は世帯間のコミュニケーションを深める大切な時間と促える者が多いことがわかる.

別居子との居住形態別にみると,「遠遠居」の場合は,「孫の面倒をみる」,「子供家族との団らん」,「子供家族との郊外旅行」など親世帯と子世帯が会って一緒に何かをする割合は低く, 遠く離れて生活していることから物理的に子世帯とのかかわりをもちにくい状況にあるためである.

iii) 食事状況

まず食事場所をみた結果が図3である. 平日, 休日ともに, 最も多いのは「三食とも家で食べる」であり,「三食とも外食」する世帯は極少数である. 高齢者の食事場所としては自宅が基本であることがわかる.

平日と休日を比べると, 休日の方に「三食とも家で食べる」世帯が少なくなり,「朝食だけ家で食べる」「朝食だけ外食」のように, 1日のうち, 一食か二食を外食する世帯が増える. これは, 休日に「子供家族との団らん」や「子供家族との旅行」をする世帯が多く, 外食が多くなっているではないかと思われる.

次いで, 食事の相手をみると (図4), 平日, 休日ともに, 最も多いのは「配偶者と一緒に食べる」世帯である.「子供家族と一緒に食べる」世帯は平日では5%と少ない. 平日に子供とかかわりのない過ごし方をしている者が多く, 子供家族と一緒に食事をする世帯が極めて少ないのは当然と考えられる. しかし, 休日になると, 大半の世帯が子供家族と会うのにも関わらず,「子供家族と一緒に食べる」のが24%であり, それほど多くない. 子世帯に会うと必ず食事をするわけではないことがわかる. このように, 大家族がともに食事をするという伝統慣習[*9]が薄らぎつつあることがうかがえる.

別居子との居住形態別にみると,「子供家族と一緒に食べる」世帯が, 平日に「近居」「遠居」「遠遠居」の場合には, それぞれ5.2%, 0.0%, 1.5%であるのに対し,「近近居」の場合には, 22.2%であり, 多く占める. 休日には,「子供家族と一緒に食べる」世帯が,「近近居」の場合には3.5%,「近居」の場合には3%,「遠居」の場合には2.5%,「遠遠居」の場合には1%である. 近年, 成都では, 親と別居距離が近い子世帯の多くは, 休日にしか炊事せず, 平日の食事は親の家で済ませる, 休日の食事は自宅でするという新しい親子の接し方が反映されている結果といえよう.

(3) 居住志向

「空巣家庭」の居住志向を, 1) 今後別居子と同居する予定の有無, 2) 介護が必要になったときに過ごしたい場所という2つの側面から考察する.

1) 別居子と同居する予定の有無

同居の予定がある者と, ない者は半々である.

別居子との居住形態別にみる (表7) と,「近近居」の場合には, 別居子と同居する予定がない者が2割であり少ないが,「近居」「遠居」「遠遠居」いずれの場合も5割であり多くを占めている.

さらに子供の人数別にみると, 子供と同居する予定があると回答した者は, 子供が「1人」の世帯では39.2%,「2人」51.9%,「3人」では63.3%,「4人～6人」では77.8%である. 子供の人数が多いほど子供と同居する予定のある者が多く, 子供の人数が1人の世帯ではその予定がある者が最も少ないことが明らかになった.

*9 中国では「核家族」は「小家庭」とも称し, 子供が結婚してから,「親世帯」と「子世帯」をあわせて「大家族」と称す. 成都では親子別居する場合, 休日に親の元に帰って一緒に食事するという慣習が存在した.

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表7. 子世帯との同居予定の有無—別居子との居住形態別，子供人数別—

予定の有無	全体	別居子との居住形態別					子供人数別				
		近近居	近居	遠居	遠遠居	χ^2	1人	2人	3人	4～6人	χ^2
	(N=203)	(N=28)	(N=58)	(N=45)	N=67	検定	(N=74)	(N=78)	(N=33)	(N=18)	検定
ある	48.7	19.2	55.2	55.6	50.7	*	39.2	51.9	63.3	77.8	*
ない	51.3	80.8	44.8	44.4	49.3		60.8	48.1	36.7	22.2	
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	100.0	

χ^2検定：＊P＜0.05　　単位：%　〈不明のぞく〉

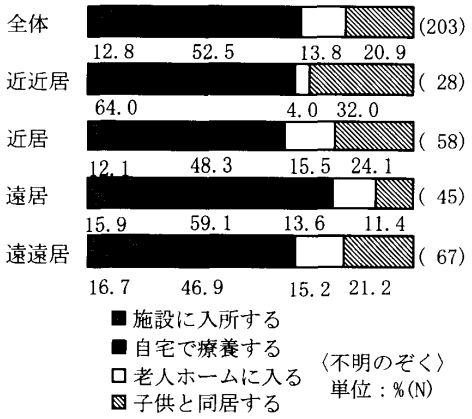


図5. 自身に介護を必要とする場合に過ごしたい場所—別居子との居住形態別—

以上のことから，別居子との居住距離が遠距離化していることや，「一人っ子政策」の影響で，子供と同居しない高齢者世帯が増えていくと推測できよう．「空巣家庭」に対応した住宅の建設の必要性が確認されよう．

2) 介護が必要になったときに過ごしたい場所

自身が病気になり，長期療養を必要とする場合の，希望の介護場所について尋ねた結果（図5），どの別居子との居住形態においても，「施設に入所する」「老人ホームに入る」を希望する者は少なく，多いのは「自宅で介護される」である．自由記述からのその理由をみると，「自宅で安心」，「できる限り子供に負担をかけたくないが，施設に入所したくない」といった内容を多くあげているように，住み慣れた空間での自立を求めていることがわかる．

以上，「空巣家庭」の生活様態の特徴と居住志向をみた．次に「空巣家庭」の空間の使用状況と不満点をみていく．

(4) 住戸の使われ方

近年，3室2庁2衛，3室2庁1衛，2室2庁1衛という住戸タイプが多く計画されている．本研究の対象世帯もこのような住戸に居住する世帯が多い（表2参照）．「空巣家庭」が，居室を複数保有する場合，居室をどのように利用しているのか，また衛生間が2室ある場合，衛生間をどのように利用しているのかをみるために，質問紙調査対象の中3室2庁2衛（3戸），3室2庁1衛（2戸），2室2庁1衛（3戸）に居住する世帯に対し，8事例の住み方調査を行い，その居室，衛生間の使われ方をみる．

1) 居室の使われ方

居室3室を保有する3室2庁2衛，3室2庁1衛では，5事例の世帯において，夫婦が就寝する主寝室[*10]以外の2室のうち，1室は夫婦の読書空間として使われ，もう1室は別居子の宿泊時の就寝空間として使われている．居室2室を保有する2室2庁1衛では，夫婦が就寝する主寝室以外の居室は，夫婦の読書空間として設けられるのが1例である．読書もできる，しかも子供が宿泊できるような空間として設けられているのが2例である．これらの事例をみると，居室が複数ある場合，子供が宿泊できるような居室を設けていることが分かる．

2) 衛生空間の使われ方

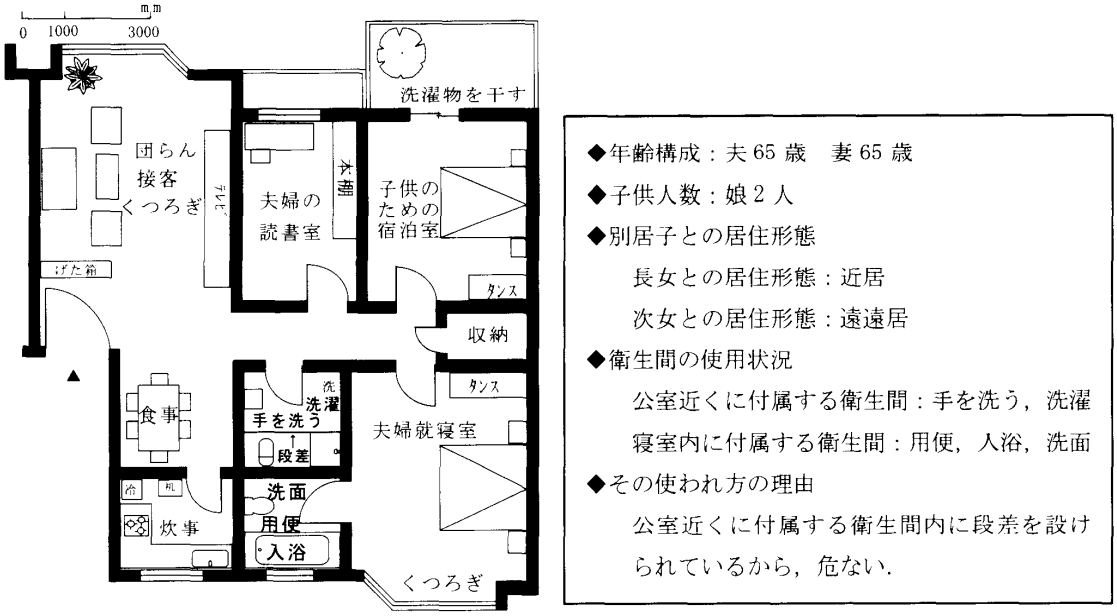
調査対象住戸タイプの衛生空間は，近年最も多く建設された洗面，入浴，用便，洗濯という4機能を対応させた空間として設けられている平面であるため，衛生間で洗面，入浴，用便を行っているほか，洗濯行為も衛生間で行っているのが一般的であるが，衛生間2室を保有する3室2庁2衛では，衛生空間と洗濯空間を使い分ける事例が2例みられる．2例ともに同じ使い方であるため，その1例の詳しい使用状況を図6に示す．

図6は，夫婦ともに年齢は65歳で前期高齢者世帯である．2つの衛生間を使い分ける理由は，まず1つ目の公室近くに設けられた衛生間では，便器，シャワー室のある床が一段高く設けられ，段差があることによ

[*10] 主寝室とは，居室の中で，単衛生間平面の場合，面積が最も広い部屋を指し，双衛生間平面の場合，衛生間を付属した部屋のことを指す．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics



3 室 2 庁 2 衛

図 6．衛生間の使用状況

表 8．住戸に対して不満のある場所とその中最も不満のある場所（単数回答/複数回答)—住戸タイプ別—

	全体 (124/141)	3室2庁2衛 (9/10)	3室2庁1衛 (29/34)	2室2庁2衛 (9/12)	2室2庁 1 衛 (47/49)	1 室2庁1衛 (10/19)	1 室1庁1衛 (10/13)
	SA/MA	SA/MA	SA/MA	SA/MA	SA/MA	SA/MA	SA/MA
客庁	17.7/37.6	0.0/40.0	20.7/29.4	11.1/16.7	19.1/31.1	29.4/57.9	10.0/46.2
餐庁	5.6/19.9	0.0/20.0	0.0/14.7	11.1/25.0	10.6/16.4	5.9/21.1	0.0/23.1
衛生間	46.9/63.1	55.6/60.0	66.7/55.9	66.7/66.7	40.5/49.2	35.3/68.4	50.0/76.9
ﾊﾞﾙｺﾆｰ	13.7/29.1	22.2/60.0	17.2/26.5	11.1/33.3	14.9/21.3	5.9/18.2	10.0/30.8
台所	4.8/ 7.8	0.0/ 0.0	3.4/ 5.9	0.0/ 0.0	6.4/ 4.9	5.9/15.8	10.0/15.4
*寝室	8.9/17.0	0.0/ 0.0	6.9/11.8	0.0/ 0.0	6.4/11.5	17.6/31.63	20.0/30.8
書斎	2.4/ 7.8	22.2/30.0	0.0/ 0.0	0.0/ 8.3	2.1/ 4.9	0.0/ 5.3	0.0/15.4

注：SA最も不満のある場所，MA不満のある場所　　χ^2検定*P＜0.05　〈不明のぞく〉単位：%(N)

り，入浴した時に転んだことがあったということである．衛生間にこのような段差を設けると危ないという苦情が出ている．そのために，公室近くに設けられた衛生間では洗濯，手洗いや洗面にしか使わない．用便，入浴は寝室に付属の衛生間で行っている．

もう 1 事例の衛生空間と洗濯空間を使い分ける理由は次のようである．① 公室近くに位置する衛生間は窓がないため，換気扇を使うと，音がうるさく落ち着かないので，入浴，用便には使わない．② シャワーを使うと，衛生空間全体の床が濡れるので，滑る危険がある．③ 公室近くに設けられた衛生間の便器が洋式でないので使いにくい．これらの理由から，公室近くに設けられた衛生間は洗濯の専用空間として使われている．

以上の事例から，「空巣家庭」向け住戸平面計画において，衛生間に段差を設けないことと，衛生間と洗濯空間を別々に設けることが示唆される．

(5) 住戸に対して不満のある場所とその不満点

1) 住戸に対して不満のある場所

まず「住戸に対して不満のある場所」（複数回答）をみると，全体として「特になし」と回答した者が 3 割弱であり，7 割の者が住戸に対して何らかの不満を持っている．

つぎに，住戸に対し不満があると答えた者について，その場所を尋ねたところ（表 8)，多くあげているのは「衛生間」「客庁」「バルコニー」「寝室」「餐庁」という順である．その中で「最も不満のある場所」として，半数弱の者が「衛生間」をあげている．

住戸タイプ別にみると，「3 室 2 庁 2 衛」，「3 室 2 庁 1 衛」，「2 室 2 庁 2 衛」のいずれにおいても 3 割以上

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表9. 衛生間に対する不満点

1. 狭い	48.1
2. 風通しが悪い	31.5
3. 日当たりが悪い	27.8
4. 衛生間から寝室まで遠い	13.0
5. 滑りやすい	7.4
6. 設備が使いにくい	9.3
7. その他	0.0

〈不明のぞく〉 [複数回答]
単位：% N=58

の者が「特になし」と回答し，住戸に対する満足度が比較的高いことがわかる．これは，事例調査で確認されたように，これらの住戸タイプは食居分離，食寝分離といった基本的な住み方が可能で，さらに余裕室を確保できるため，別居子と積極的な交流をする生活に対応できるからと考えられる．

また「1室2庁1衛」，「1室1庁1衛」において，不満のある場所として「寝室」をあげている者が2割を占め，ほかの住戸タイプと比べ多くなっている．

2) 衛生間に対する不満点

不満のある場所として最も割合の高い「衛生間」への不満点として多くあげているのが（表9），「狭い」という面積上の不満や「日当たりが悪い」という住環境上の不満である．さらに住戸タイプ別にみても，その違いはみられない．これは，前述のように，洗面，入浴，用便，洗濯という4つの機能を対応させて設けており，また窓のない衛生間が多いためと考えられる．

3) 事例からみた不満のある場所とその不満点

事例調査では，どの住戸タイプにおいても，「住戸に対する不満のある場所」（複数回答），さらに「最も不満のある場所」（単数回答）として，「衛生間」をあげている．

その不満点として（表10），「風通しが悪い」「滑りやすい」を多くあげている．その他，「窓がない或いは窓の位置が高い」という不満点も多い．これは，事例の各住戸タイプにおいて，衛生間に窓が設けられている場合，その高さは，それぞれ1.5m以上あり，身長が低い高齢者にとって，窓の開閉時に不便が生じたということである．このことから，衛生間の平面だけではなく，各室の窓の高さなど，居住者の身体を考慮した計画が必要であることが示唆される．

(6) 住宅に対する改善要求

1) 改善要求の有無

現住宅に対する改善要求の有無について尋ねた結果，全体として，半数が住宅に対する改善要求が「ある」

表10. 事例調査からみた衛生間の不満点—住戸タイプ別—

不満点	住戸型 3室2庁2衛 (3戸中)	3室2庁1衛 (2戸中)	2室2庁1衛 (3戸中)
1. 狭い	●	●	
2. 風通しが悪い	●	●●	●●
3. 日当たりが悪い			
4. 滑りやすい	●		
5. 住宅の設備が使いにくい	●		
6. 衛生間から寝室まで遠い		●	
7. 窓が無い或いは高い		●●	●●

[複数回答] 凡例：●不満点の事例数

と回答している．回答者の年齢別にみると，「70歳以上」の後期高齢者において，改善要求がある者の割合は7割であり，多くを占めている．

2) 改善要求内容

改善要求が「ある」世帯の改善要求の内容をみると（表11），全体的にみると，「衛生間に手すりをつける」，「衛生間のドアを引き戸にする」という衛生間に対する改善要求を合わせると8割となり，圧倒的に多い．衛生間が最も改善を必要とする場所となっている．

回答者の年齢別にみると，「70歳以上」の後期高齢者において，「衛生間に手すりをつける」，「通報ベルをつける」をあげる者が多く，安全面に対する改善要求が多い．

「住戸内の段差をなくす」という改善要求をあげる者が3.1%と少ない．これは，本調査に対象住宅において段差をつけた「錯層式」という住戸平面が4.5%と少ないからである．

「共用階段に手すりをつける」「安全なエレベーターをつける」など共用部分に対する改善要求は「60歳未満」においてごくわずかである．一方，「60～65歳未満」「65～70歳未満」の前期高齢者と，「70歳以上」の後期高齢者いずれにおいても，その改善要求がみられる．高齢者のための安全で住みやすい住環境づくりには，共用階段において手すりをつけることや，エレベーターを設置することが望ましい．

4. 要　約

本研究では「空巣家庭」の生活様態，住空間の使用状況，及び住戸に対する不満点を明らかにし，今後の中国の高齢化社会において，都市集合住宅における

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表 11. 住戸に対する改善要求—回答者の年齢別—

改善要求	全体 (N=95)	60歳未満 (N=25)	60～70歳未満 (N=52)	70歳以上 (N=26)	χ^2 検定
1. 共用階段に手すりをつける	13.7	4.0	17.3	17.6	*
2. 安全なエレベータをつける	11.6	0.0	15.4	11.8	
3. 衛生間に手すりをつける	47.4	56.0	38.5	64.7	
4. 衛生間のドアを引き戸にする	29.5	44.0	26.9	17.6	
5. 電気容量を増やす	10.5	12.0	11.5	5.9	
6. 通報ベルをつける	31.6	24.0	28.8	47.1	
7. 非常出口を設置する	11.6	12.0	13.5	5.9	
8. 住戸内の段差をなくす	3.2	0.0	5.8	0.0	
9. その他	5.3	0.0	3.8	17.6	*

χ^2検定： *P<0.05　［複数回答］〈不明のぞく〉 単位:%

「空巣家庭」の高齢者に対応する住空間のあり方を考察した．その結果を以下に要約する．

1) 子供と別居する契機は60～70歳未満，70歳以上では「子供の結婚」が多い．60歳未満では，「子供の他の都市での就職」「子供の留学」という理由は他の年代に比較するとその割合が高い傾向がみられる．戸籍緩和制度により就職地域が拡大したことや，大学入学以前から海外留学をする傾向にあることがこの背景にある．このように中年層「空巣家庭」化が始まっている動向が把握される．

2) 別居子との交流について，「近居」「遠居」「遠遠居」の場合には，「休日に会う」のが最も多く，休日に子供と積極的に交流している世帯が多い．時間距離で最も近接している「近近居」の場合には，「毎日会う」のが6割弱であり，最も頻繁な交流がみられる．

3) 平日，休日の昼間に，多くの高齢者が「家事をする」「趣味を楽しむ」「社区の活動に参加する」「子世帯との団らん」など，生活行動の多様さがうかがえる．

4) 食事状況について，平日，休日ともに，三食とも自宅で食事をし，配偶者と一緒に食べる者が最も多い．子供家族と一緒に食べる世帯は平日では極めて少なく，休日でも4分の1程度である．休日に子世帯に会って，食事をするという伝統慣習が薄れつつあることがうかがえる．

5) 希望の介護場所について，「施設に入所する」「老人ホームに入る」を希望する者は少なく，多いのは「自宅で介護される」である．自由記述からのその理由をみると，「自宅で安心」，「できる限り子供に負担をかけたくないが，施設に入所したくない」といった内容を多くあげているように，住み慣れた空間での自立を求めていることがわかる．

6) 住空間の使用状況について，子世帯と積極的に交流している世帯が多いため，居室が複数ある場合，子供が宿泊できるような居室を設けている．

7) 住戸内において不満のある場所として，最も多くあげられているのは衛生間であり，約半数に達する．その不満点として，「狭い」という面積上の不満，「日当たりが悪い」，「風通しが悪い」，「滑りやすい」，という住環境に対する不満が多い．

8) 住戸に対する最も不満のある場所として「衛生間」であることと，自身が病気になった場合は，在宅介護を希望する者が多いことから，住宅に対する改善要求として，「衛生間に手すりをつける」，「衛生間のドアを引き戸にする」という衛生間に対する改善要求が最も高く，衛生間が住戸の中で最も改善が必要な空間であることが確認される．

引 用 文 献

1) 叢小榕：中国の高齢化社会と「空巣」現象，専修大学出版局通信，NO.6（2003）
2) 藤田　忍，表野聖子：中国の都市高齢者世帯における支え合い居住に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第551号，253-258（2002）
3) 曹文燕，長澤　泰，山下哲郎：天津中層集合住宅団地に住む高齢者の住生活様態とその特徴，日本建築学会計画系論文集，第490号，73-81（1996）
4)『成都統計』，成都統計局（2003）
5)『成都商報』，第2版．成都新華社（2000）

NII-Electronic Library Service